

藤香会だより

第30号
令和3年1月1日発行
発行者
一般社団法人 藤香会
事務局
092-724-0007
発行責任者
毛屋 嘉明

激動の新年を迎えて

黒田家第一六代 黒田長高



新年明けましておめでと
うございます。
昨年は2月12日忠之公法

要の為の訪福以降はコロナの感染拡大により様々なイベントが中止となり全く福岡は勿論姫路等へも行く機会がなくなり、皆さまのお顔を拝見できなくなりました。更に5月に予定しておりました娘の結婚披露宴も延期となりました。そのようなコロナ禍のなかではありますが、秋に感染防止対策の中、岐阜県関ヶ原古戦場記念館の開館式に出席してまいりました。そして、徳川、石田、大谷、島津、小早川各家末裔の人たちと関ヶ原合戦についてのトークショーに参加してまいりました。(この模様はYouTubeでご覧になれます。)

未だ感染の収束の兆しも見えないまま新年を迎えてしまいました。あまり外に出られなくとも皆さまお元気に新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。
藤香会の一般社団法人化による新入会員及び賛助会員の増加、そして皆さまのご健康とご多幸を祈念します。

黒田裕大
皆さま、初めまして。このたび黒田絢子さんと入籍いたしました黒田裕大と申します。



私は山形県で生まれ育ち、県内の高校を卒業後、大学進学の際に上京し、国際基督教大学に入学しました。大学・大学院では数学を専攻し、現在は東京都内の中高一貫校で数学を教えています。

小さい頃から身体を動かすのが好きで、中学校、大学でバレーボール部に所属しておりました。絢子さんとの出会いは大学のバレーボール部でした。また北国育ちということもありスキーの経験もあり、年に数回、絢子さんと一緒にバスケットボールの顧問も担っており、生徒と一緒にバスケットボールに親しんでいます。

仕事では主に高校の数学の授業を担当しています。比較的小さな学校の為、生徒と教員の心理的な距離も近く、和やかな雰囲気での授業を行っております。

私はまだ黒田家のことはよく知りませんが、至らない点も多々あり、皆さまにご迷惑をおかけしてしまうことも多いと思いますが、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

新しい年を迎えて

会長 山崎 拓



会員の皆さま、賛助会員の企業・団体の皆さま、明けましておめでとうございます。皆さまにとって令和3年がすばらしい年となりますよう、心からお祈り申し上げます。

令和2年は世界的な新型コロナウイルス感染にさらされ、国内でも外出自粛、諸行事の中止などが相次ぎ、経済・社会の状況も低調に推移し、未だにこの状況が続いております。

藤香会の行事も2月の忠之公のご法要を最後に如水公、長政公の法要、神社参詣なども中止のやむなきに至りましたが、理事有志で墓前の参拝だけを行いました。また総会と史跡巡りは、コロナ感染防止を徹底して実施いたしました。

総会の中で私は、「3月19日に本会が一般社団法人化され、新しい形をとった会としてスタートした。コロナの影響で会の行事にも支障が出て来たが、郷土の歴史を掘り下げ、文化の振興に尽力したい。」と申しました。どうか皆さまも福岡の歴史や黒田家歴代藩主の偉業を学び、誇りを持って藤香会の文化振興の事業にご協力を切にお願いしたいと存じます。

最後になりましたが、当会の名譽顧問である長高様を忠之公の法要以降福岡にお招きすることが叶わず、会員の皆さまと親しく懇談することができなかったことはまことに残念でした。このような中で、黒田家のご息女・絢子さまが裕大さまと結婚されて、新しい家庭を築かれるうれしいニュースもありましたことをご報告申し上げます。

新しい年が皆さまにとって健康でご活躍できるすばらしい年となりますよう改めてお祈り申し上げます。

長政公ご法要



長政公法要_墓前で参詣する理事たち

新型コロナウイルス・ウイルス感染が収まらないのため、3月の如水公のご法要と同様に墓所清掃のご法要を崇福寺からの要請もあつて取りやめしました。そこで理事とほかの有志13名による墓参のみ執り行いました。

勉強会が開催されました

福岡市博物館で恒例の勉強会が9月25日(金)13時30分より開催されました。今年は新型コロナウイルス感染防止のため会場の講堂定員250名のところ、三密を避けるために半分の120名となりました。会員43名、市民の参加者91名の134人が出席しました。

講師は原土井病院理事長原寛先生で、山崎会長は講師紹介の中で、福岡藩医原三信の子孫であること、現在はお母堂の長兄にあたる方が三信を名乗って本家を継いでおられることを説明された。

先生は、「私が実践する元気で長生きする方法」と題して1時間30分の講演をされました。300年前に書かれた福岡藩の儒者貝原益軒の「養生訓」に書かれていることは、当時の世界では誰もが気にも留めなかった「老人で元気に過ごす方法」を述べたもので、現代にも通用していることを述べられました。

その上で、
・毎日目標を立てて歩く(7,800歩)、
できれば頭を使いながら(たとえば引き算をしながら)歩く
と認知症予防にもなること

会員クリック②



宗家 高取八山(栄作)・七絵

時は戦国時代。豊臣秀吉とともに朝鮮出兵した折に黒田官兵衛公・長政公により初代・八山は見出されました。後に後藤又兵衛を迎えにやり、直方市の鷹取山の麓に開窯したのが高取焼の始まりです。鷹取山の『鷹』の字を当時の朝鮮半島の

高麗の『高』に換えて『高取』という苗字と士分の位を与えられました。直方の永満寺窯↓内ヶ磯窯↓山田窯(嘉麻市)↓白旗山窯(飯塚市)を経て、高取の二代目・八歳貞明の時に現在の鼓窯(東峰村小石原)に移窯、伝統を受け継いでいます。当時の日本は茶の湯が盛んな時代で、茶陶をこの山奥の窯で密かに焼いては黒田藩に献上していました。このように官兵衛公や長政公以来、黒田藩のお殿様に愛されてきた器は現代も登り窯などの新窯での焼成、土作りに必要な唐臼など、昔ながらの技法を保持しています。昭和の時代に、飯塚市にあった初代・八山の墳墓を当家に移築する際には黒田長禮公にご寄進頂きその碑が建立されており、現在では栄作が十三代・八山を継承し陶主として作陶、数年前より藤香会に入会させて頂きました。

先日は多くの会員の皆様に直系窯の現在の様子を御覧頂き心から御礼申し上げます。当家には登り窯・単窯・唐臼などの伝統的な施設が現在も稼働しています。また、その昔、千代町にあった【常磐館】という迎賓館の離れの茶室【残月】を移築しています。中国の指導者であった孫文が玄洋社の者と会うために寝泊りに使っていたとのことでした。 たまたま妻・七絵とその父が黒田藩の藩校であった修猷館の出身で、父は山崎会長の一学年後輩で同じ柔道部でした。そのため、会長とは古くから交流させて頂いておりましたのも藤香会のご縁を感じます。 夫婦共々、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

多くの神社仏閣を巡り、住職や郷土史家から普段聞けない話を聞く事ができるのも藤香会の史跡巡りの魅力です。



お話される講師の原寛先生



間隔を開けて着席する出席者

・階段を使う
・長時間(椅子に)座っていないで、時々立ち上がる
・睡眠時間は長すぎず5〜6時間程度(日中、体を動かせば熟睡)を実践している。また食事は、最初に食べるのは生野菜などのサラダ類
・おかず類は肉・魚にかかわらずたんぱく質を多く摂る、納豆や卵は欠かせない
・最後に白米は避け、麦・雑穀などの炭水化物を少量摂る

実践されているそうです。最後に、養生訓より「人のからだは父母をもととし、天地をはじめとしたものである。天地・父母の恵みを受けて生まれ、また養われた自分のからだであるから、私のもののようにであるが、けつして私だけのものではない。天地の賜物であり、父母がのこされたからだであるから、慎んでよく養い、いじめたりこわしたりしないで、天寿を長くたもつようにならなければいけない。」と締めくくられました。

史跡巡り

11月10日、史跡巡りを実施しました。肌寒い中を会員および家族44名の参加がありました。コロナ禍の中で「三密」を避けるため、2台のバスにそれぞれが間隔を開けて着席し、時刻をずらして出発しました。「令和」の起源となった太宰府の坂本八幡宮で会員の岡部定一郎さんから「令和の教え」と

して暦の話があった。持統天皇が、一年をいくつかに区切り、それぞれに節供(節句)を決めて、人々の安寧を祈ったことなどを話された。古心寺では渡辺桂堂住職が、秋月種雄から16代続いて黒田家に代わったこと、秋月家は日向・高鍋に移り、そこから上杉鷹山などの名君が出たことなどを話された。興雲山古心寺は大徳寺の江月和尚により山号と寺号を長政公の法号「興雲院殿古心道下」から命名され、代々大徳寺から住職を迎えている。黒田家墓所では秋陽会事務局長の吉田長利さん(本会々員)から



坂本神社前での集合写真



古心寺での渡辺桂堂住職の説明

歴代藩主や室のお墓について詳しい説明がありました。隣にある大涼寺は初代長興公の母の法号「大涼院殿」から命名されている。 秋月の史跡巡りを終えて嘉麻市大隈にある麟翁寺を訪問。住職の話では母里太兵衛は高い身長で筋肉質の人であったことが甲冑から推測されること、「母里(ほり)」は当時の方言か「なまり」と発音していたことから幕府が感状を出す際に「毛利」としたことで、幕末まで毛利姓を使い、明治になって元の「母里」に変えたことなどの説明があった。樹齢500年にもなるクロガネモチの側の母里太兵衛とその子、孫が並ぶ墓所を参拝した。

小石原に移って、太田和孝さん(本会々員)のマルワ窯を訪問、会員の一人ひとりにご飯茶わんを頂戴した。高取焼宗家では宗家の夫人高取七絵さん(本会々員)から、釉薬の甕、昇り窯、唐臼、粘土を作る水簸等の説明を受け、全て自家で作る由。その後、歴代の逸品の茶碗、茶入れ等が並ぶ部屋で、会員全員がお菓子とお抹茶の接待を受けました。

朝倉の円清寺は曹洞宗のお寺で栗山善助(大膳の父)が開基となっている。山号、寺号とも如水公の法号「龍光院殿如水円清」から「龍光山円清寺」ということが住職から説明された。